

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



地域内外の人が集まり、土地の魅力にふれる（はまなすカフェ）

特集 すすむ共生のまちづくり

- **起こったことのすべてを、前を向いて生きる力に** ③
うちカフェ お多福（宮城県仙台市太白区）
- **農場を起点に集い、支え合う** ⑤
Kふぁーむ（福島県本宮市）
- **人と地域の活気を湧き立たせるイーハトーヴ（理想郷）を目指して** ⑦
しわ元気村（岩手県紫波町）

☆専門家に聞く地域づくりのヒント
（前東洋大学 ライフデザイン学部 教授 北野 誠一さん）

生きがい仕事⑭ ⑨

みなとまちセラミカ工房（宮城県女川町）

まじわる災害公営住宅⑱ ⑩

きずな喫茶（宮城県七ヶ浜町）

場の力⑳ ⑪

はまなすカフェ（宮城県石巻市）

インタビュー あの人に会いたい⑮ ⑫

社会福祉法人 東松島市社会福祉協議会 東松島市生活復興支援センター
コミュニティソーシャルワーカー 渡邊英人さん（宮城県東松島市）

S-1 グランプリ第4回いがす大賞応募案内

地域支え合いサロン開催案内 ⑬

平成・向こう三軒両隣事情⑮ ⑭

ご近所福祉クリエイション主宰 ご近所福祉クリエイター 酒井 保さん

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

東北の元気㉔ ⑯

復興ボランティア支援センターやまがた（山形県山形市）



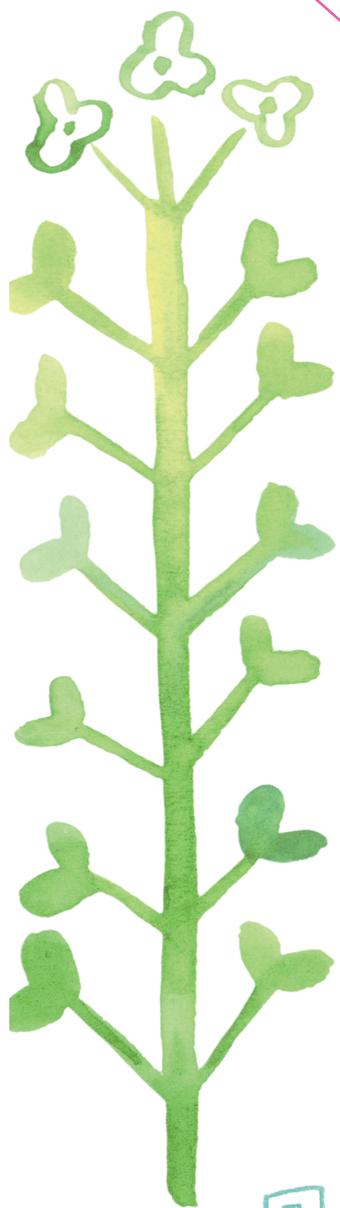
すすむ

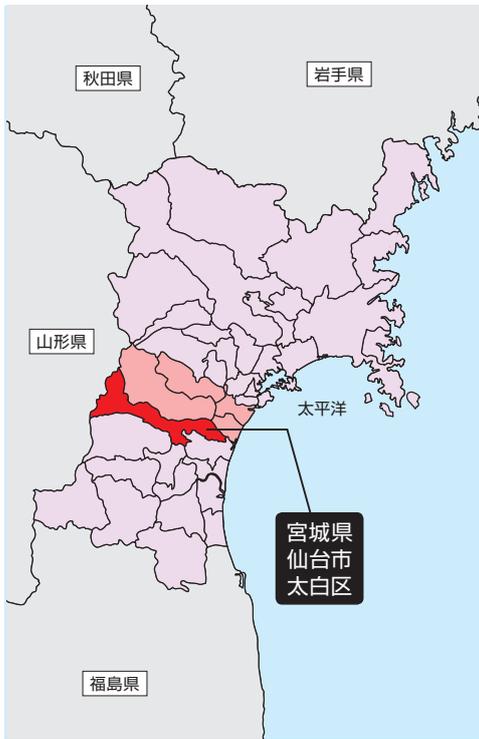
特集

共生のまちづくり

年齢や性別、生まれ育った環境や得意なこと
不得意なことがそれぞれに違うように
世のなかにはさまざまな個性をもった人がいます。
すべての人たちが、お互いの個性を理解し合い、認め合い
家庭や地域、職場などそれぞれの居場所で
個性を發揮しながら自分らしく生きること。
最近しばしば耳にするようになった「共生」という言葉には
そんな意味が込められています。

わたしたちが「共生」していくためには
まず、お互いのことを知り、理解し合うことが必要です。
今回の特集では、そんな「共生」のまちづくりをすすめる
3つの取り組みをご紹介します。





自宅のリビングを開放したカフェでおしゃべりを楽しむ

起こったことのすべてを、前を向いて生きる力に

◎うちカフェ お多福 (宮城県仙台市太白区)

ポイント

- 障がいのある家族との共生
- 自分の経験を生かした同じ悩みをもつ人たちが憩える場づくり

仙台市太白区佐保山。緑に囲まれた閑静な住宅街の一角に、毎月第2・3水曜日になるとカフェの開催を知らせるのぼり旗が立つ。沼澤由美さんが主催し、自宅のリビングを開放して行っている「うちカフェ お多福」だ。

多様な人が集う場所

当初は障がいをもつ人やその家族が憩う場として始まったカフェだったが、はじめての開催から半年がたったいまでは、障がいをもつ人やその家族だけでなく、近所の住民や福祉・介護関係者も訪れるオープンな場になっている。

自宅のリビングという場所柄、訪れた参加者はリラックスした雰囲気だ。思いに時間を過ごす。沼澤さんは高次脳機能障害をもつ夫のリハビリや介護をしてきた自身の経験や知識を

生かし、障害者相談員として活動しており、カフェには障がいや介護の悩みの相談にやってくる人もいる。また、さまざまな人が訪れるため、普段縁のないような人同士が出会い、交流する場にもなっているという。

1人で抱え込まない

「お客さんから、ここに来ると時間が過ぎるのが早い、すごくゆったりできると言われます」と沼澤さんは微笑む。

1人で抱え込まない

沼澤さんの夫が高次脳機能障害を発症したのは、2009年2月のこと。突如激しい頭痛に見舞われ、病院に搬送された。くも膜下出血だった。幸い一命はとりとめたものの障がいが残り、社会復帰は難しいとされた。

沼澤さんは、夫とともに懸命にリハビリに取り組ん



うちカフェ お多福

主催者 沼澤 由美さん

「人と人とのつながりをもつことが、
自分がつぶれないためにたいせつなことだと思います」

だ。その甲斐あって、翌年の10月には、杖をつきながら歩くことができるようになるまでに回復したという。しかし、回復期リハビリ病院や老人介護施設で、同じように入所していたほかの利用者のもとに、家族が見舞うことが徐々に少なくなっていくなど、家族の病気や障がいに向き合いきれなくなってしまう様子も目の当たりにした。

困難な状況に向き合うことができたのは、「一人で抱え込まないようにした」からだと言います。沼澤さんは「人と人とのつながりをもつことが、自分がつぶれないためにたいせつなことだと思っただけです」



ハンドドリップで淹れたコーヒーでお客さんをもてなす

自分自身のことはもちろん、家族が病気や障がいであることを隠してしまいがちな人も多いが、沼澤さんは自身がかねてから参加していた趣味の場に、あえて夫を連れて行くなど、友人や知人に夫の病気を理解してもらうため、積極的に働きかけた。

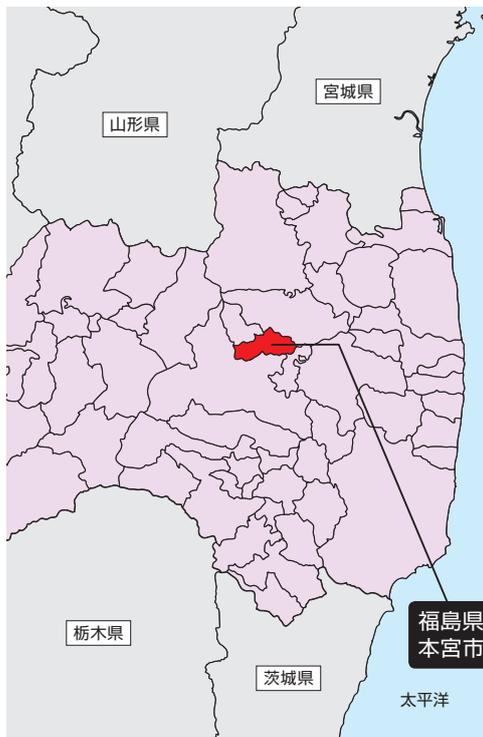
沼澤さんがカフェを始めしたのは15年の12月。同年11月に回覧板で山田地域包括支援センターが地域での交流拠点づくりの一環としてカフェを主催するボランティアを募るチラシを見たことがきっかけだった。沼澤さんは同年6月、仕事を退職したことを機に、高次脳機能障害者家族会からの推薦により、「仙台市障害者福祉協会障害者相談員」の任命を受けたばかりだった。相談員は、仙台市からの委託を受けた障がい者やその家族が、電話や対面で相談を受ける活動を主にしている。自分と同じような悩みや困難のなかにいる人のために、もっと何か役に立てることはないかと、相談員としての活動を模索していた沼澤さんは、チラシを見たその日に包括支援センターへ足を運び、生活支援コーディネーターの岩本直美さんに助言を受けながら、カフェの開催に向けて準備を行った。

公共施設などを借り、そこでカフェやサロンを開催する人が多いなか、よりリラククスできる場所を訪れる人を迎えたいと考え、あえて自宅での開催を決めた。負担があるのではないかと周囲から心配する声もあったが、「定期的にお客さんを迎えることが、丁寧にお掃除をするいい機会になっています。むしろ、1か月の生活のサイクルができて自分のためになります」と沼澤さん本人はあくまでも前向きだ。

障がいのある家族と
ともに生きる

「夫が病気になってから障がいも、老いや病気も、他人ごとではないと思うようになりました」と沼澤さんが言うように、家族や身近な人がある日突然、病気やケガのために障がいをもつようになることは、誰にも等しく起こり得ることだ。相手のありのままを受け止め、希望を捨てずにもともに生きることは、簡単なことではないかもしれない。けれど、ときに周りの手を借りながら、自ら積極的に社会に交わって生きていくことが、多様な人が普通に生きていくための第1歩になるのではないだろうか。吉

DATA
うちカフェお多福
仙台市太白区佐保山1-30
TEL 022-244-5275
毎月第2・3水曜日開催



畑での収穫の様子

農場を起点に集い、支え合う

◎ Kふぁーむ (福島県本宮市)

ポイント

- 「手をつくす農業」をとおして、障がいのある人は自分を生かす場所を見出していく
- 農場の環境を活用して、さまざまな背景を持った人がつながる

福島県本宮市和田地内。ゆるやかな山上に東京ドーム約3個分の広大な農場地帯が広がる。「Kふぁーむ」と呼ばれるその農場には、ブタや鶏（ネラ）、ヤギなどの動物を飼育する小屋や馬が放し飼いにされた牧草地、野菜を栽培する畑、ソーラーパネルが備わっている。そして農場を囲んで、特別養護老人ホームしらさわ有寿園、グループホームカサール、多機能型支援センターVIVO、バーベキューハウス、ログハウス、そしてイタリアンレストランとレンテビアンコが隣接している。ここでは一般客や高齢者、知的・精神の障がいのある人、地域の人、スタッフが農場という環境を共有している。

Kふぁーむは一般客に開放されており、緑豊かな景色や動物とのふれあいを楽しめる。また、農場で採られた新鮮な旬の野菜や、こだわりの手づくり飼料で育てられた豚肉や鶏卵を、レストラン「トレンテビアンコ」やバーベキューハウスで味わうことがで

福島県本宮市和田地内。ゆるやかな山上に東京ドーム約3個分の広大な農場地帯が広がる。「Kふぁーむ」と呼ばれるその農場には、ブタや鶏（ネラ）、ヤギなどの動物を飼育する小屋や馬が放し飼いにされた牧草地、野菜を栽培する畑、ソーラーパネルが備わっている。そして農場を囲んで、特別養護老人ホームしらさわ有寿園、グループホームカサール、多機能型支援センターVIVO、バーベキューハウス、ログハウス、そしてイタリアンレストランとレンテビアンコが隣接している。ここでは一般客や高齢者、知的・精神の障がいのある人、地域の人、スタッフが農場という環境を共有している。

障がいのある人たちは、卵を洗うことや、鶏のエサづくり、畑でのパプリカづくり、ニラの苗育てなど、スタッフに見守られながら、さまざまな農作業に携わる。農作業以外にも、隣接した支援センターVIVOで、ビスコッティやジェラードなどのお菓子づくりやシャープペンなどの部品のもぎ取り作業を行っている。「手先

きる。

それぞれが輝ける場所で

こうした野菜の栽培や動物の世話をしているのは、農業の専門知識を持ったKふぁーむのスタッフと知的・精神的な障がいのある人たち。「手をつくす農業」をモットーに、人の手で飼料をつくることから始め、時間をかけて、個別に面倒を見ながら育てている。効率を最優先するのではなく、丁寧で、細やかな農作業、動物の飼育作業をたいせつにしている。そういった作業を経ているからこそ出せる、食の安全性や自然な味わいがある。



農場長 渡辺清昭さん(左)と看護師 野中幸雄さん(60)

Kふあーむ

農場長 渡辺 清昭さん

「それぞれの持ち味を活かして、楽しんで」

が器用で長時間の作業もできる人」「力仕事が得意な人」など、それぞれの得意意・不得意がある。職員が、その人の特性を知って、それぞれに合った仕事を提供している。「いかにその人に合った環境をつくるか、だと思えます。ずっと遊んでいたいという人はあまりいません。皆さん働いて社会に貢献したいという意識が強い」と話してくれたのはKふあーむの農場長を務め、精神保健福祉士の資格をもつ渡辺清昭さん(61歳)。

開放的な場所で仕事ができていることで、Kふあーむに来るのが楽しいと、毎日通ってくる人も多いそうだ。毎日ここに来て仕事をすることで、一日、一週間のリズムがつくられる。生活のリズムが整うことで心や身体の調子も良くなっていく。農場やスタッフと関わるなかで、正の循環が生まれていくのだろう。「はじめは卵を洗えなかった人が3年間コツコツ続けて今は誰よりも速く卵を洗えるようになりました」

多様な交流の場

Kふあーむは外部からの研修・ボランティアも積極的に受け入れている。参加者は幼稚園生や学生から、社会人、学校の先生まで。畑仕事や動物の世話を受け持つ。自然や動物とふれあい、農作業などの貴重な体験もできるほか、障がいのある人たちと一緒に作業をすることで、障がい理解・



Kふあーむの様子。雄大な牧草地帯の奥に臨む建物がしらすわ有寿園

学習にもつながっている。Kふあーむ内にはほかに特別養護老人ホームしらすわ有寿園もあり、高齢者も生活している。施設では農場と協力し、農場の動物とふれあう企画を行っている。利用者からは、「(農作業をしていた頃の)昔を思い出す」などの声があがり、笑顔が自然にこぼれるという。Kふあーむの敷地内には、本宮市白沢地域包括支援センターもあることから、支援センターの職員と協力して認知症サポーター養成講座を開講。スタッフの工夫により子どもにもわかりやすい認知症講座を行っている。

ほかにも、Kふあーむ内では、認知症カフェの開催や、地域の人も招いて夏祭りを行うなど、利用者同士や地域の人と、世代や障がいなどを越えた、交流も行われている。施設間で、他職種のスタッフの連携がとれており、いざというとき助け合うことができるのも強みだ。

渡辺さんは、「具合が悪くなった人はふらっと農場に来てほしい。景色を眺め

るだけでも違うはず。来る人を受け入れる場所、楽しく自由にやれる場所でありたい」と話す。Kふあーむは、利用者やお客様だけでなく、地域で暮らす人、生きづらさを抱えた人にも開かれている。そして、ここに来た人は自然や動物、人と関わる中で癒されていくはずだ。

それぞれが互いの違い、良さを認め合い集うことができる場所づくりが、共生の礎となる。

DATA

Kふあーむ

しらすわ有寿園などを運営する(社)安積福祉会、Kふあーむの経営面を手がける(有)アサカサービスセンターなど、あさかホスピタルグループの全5法人がKふあーむの運営に協力している。「輪・仲間・循環」を意味する、共生事業「チルコロ」を掲げ、各法人・施設が連携して取り組んでいる。あさかホスピタルグループは、統合的で先進的な、医療福祉サービスを提供しており、共生社会の実現を掲げ、障がい者が幸せに暮らせる社会を目指している。これらの取り組みは、対外的に高く評価されている。

〒969-1205 福島県本宮市和田字戸ノ内158-8

TEL 080-2801-0412 (平日 8:30 から 17:00) URL <http://asaka.sc/>



子どもも集い、にぎわう後庵

人と地域の活気を湧き立たせる イーハトーヴ(理想郷)を目指す

◎しわ元気村(岩手県紫波町)

ライター：熊谷智美

ポイント

- 働くことが楽しいと思える就労の場の提供
- 誰もが集い交流できる居場所づくり

昼時、「後庵」は食事をしながら談笑する客で賑わっていた。運営しているのは紫波湧活協議会の事業の一つ「しわ元気村」。働き手のなかには障がい者や社会活動の準備段階にある人もいる。

お客様と働き手に合わせて 柔軟にスタイルを変更

しわ元気村が活動をスタートさせたのは、今年4月24日。地域で長年親しまれながらも休業していた食事処の後庵の店舗を借り、バイキングスタイルの昼食提供のほか、予約制でカラオケ喫茶などの営業を始めた。

8月からは後庵の店名を引き継ぎ、バイキングのスタイルから蕎麦や定食などを提供する従来の後庵スタイルに変更している。当初のバイキングは好評だったが、障がいをもった人たちにとっては少し慌ただしく、注文をとつて料理を運ぶ食堂のスタイルのほうがちがったのだ。一緒に働くスタッフは、「障がいの有無で壁をつくらないようにしています」と気遣い、

「コミュニケーションが上手になつてきましたよ」「仕事のことでも自ら質問できるようになっていきます」などと成長を喜んでいる。

さまざまな機能を備えた 地域の拠点

しわ元気村は食事処のほか、オードブルや弁当の製造販売も行っている。この秋からは、岩手流通センター内にある盛岡卸センターの組合会館・ラポール盛岡での弁当販売も始まった。

また、イベントのための会場提供も行っている。夏休み中には盛岡市内の子ども会が、蕎麦打ちと紫波町産のブルーベリーを使ったジャムづくり体験を行った。場所を貸すだけでなく、紫波町の食や文化を体験できる企画の提案も行い、このときは40人を超える参加者が食体験を楽しんだ。今後は、ケアそばカフェとして、家族の介護をしている人や悩みを抱えている人がひと息つける場所づくりをする計画もある。ほかに、地域の食材を活かす



後庵に灯りが戻ったことに地域の人たちも喜んだ

紫波湧活協議会は宮澤賢治の理想郷・イーハトーヴの実現を目指し、コミュニティ再生と共生社会を掲げて活動している。

名称である「湧活」には、生活弱者の生活や就労支援によって、その人の力を引き出すエンパワメントの意味がある。現在、一般社団法人アースメイト（就労継続支援B型事業所）の利用者を外部就労先として受け入れているほか、今後は

かした商品やメニューの開発、Uターンやイターン支援など、地域や地域の人たちが元気になるような事業の展開を目指している。

**地域と地域住民が
生きいきと暮らすために**

DATA

**しわ元気村
(紫波湧活協議会)**

岩手県紫波町上平沢字南馬場5-14
TEL 019-673-8282

営業時間
・昼 11:00 ~ 14:00
・夜 17:00 ~ 21:00 (予約制)
不定休

高齢者やシングルマザーなど、誰もがやり甲斐をもって働いたり、集える場づくりを目指している。

また、空き家や店舗の再生によって地域の活況を湧出したり、行政と民間をつなぐワンストップサービスも目指している。しわ元気村の取り組みはそのスタートラインといってもいいだろう。明るくて、誰もが集える心地よい居場所づくりから、さらなる展開が期待される。



ポリウム満点の手づくり弁当

専門家に聞く地域づくりのヒント



前東洋大学 ライフデザイン学部 教授
NPO 法人 おおさか地域生活支援ネットワーク 理事長

北野 誠一 (きたの・せいいち) さん

36歳まで、大阪で障害児の通園事業の職員。それから58歳まで、大学の教員。その後6年間、パーキンソンの母の介助。64歳にして、自由人。それでもって、66歳の現在滋賀県や兵庫県西宮市や大阪府寝屋川市等の「障害者施策推進協議会」の委員長や、地域自立支援協議会の委員長。さらに、2016年から始まった大阪市や兵庫県明石市の「障害者差別解消支援地域協議会」の委員長。前年、これまでの活動のまとめとして、『ケアからエンパワメントへ』（ミネルヴァ書房）を、編集者さんにお尻を叩かれながら完成。私のこのコメントに出てくる「エンパワメント」に興味をもたれましたら、ぜひお読みください。

共に紡ぎあげる共生物語

今回の「共生のまちづくり」は、その規模も理念もまったく異なる主体が生み出した3つの物語だ。

「うちカフェ お多福」は、まさにどこにでもありそうな、個人と家族の物語だ。

「夫の病気や障がいは自分ひとりの力ではどうにもならないことだと思いました。状況を隠さず、人々とのつながりをもつことが、自分がつぶれないためにたいせつなことだと思ったんです」。いいね、夫のためだけでなく、自分のこととしっかりと言えるのは。そしてそのことが、「夫が病気になってから障がいも、老いや病気も、他人ごとではないと思うようになりました」に展開していくのだ。

自宅を開放して、定期的な人を迎えるという展開とその負担についても、「丁寧にお掃除をするいい機会になっています。むしろ1か月の生活のサイクルができて自分のためになっています」と、何でもいいほうにとらえていくところが素敵だ。

「お多福」は、そのうち「福は内、鬼は外」などと野暮なことは言わず、「鬼さんもちょっくら寄っといで」などと言いつつも出さずかもしれない。

「Kファーム」は、医療法人を中心とした一定規模のグループ法人が展開する物語だ。

緑豊かな農園と動物たちとエコロジーと夢とロマンがあり、子どもも障がい者も高齢者も共生する取り組みはいいと思う。

たいせつなことは、障がい者や高齢者や病人が主に共生していて、一般市民が訪ねてくる、かつてのコロニー型の活動では

なく、グループ法人全体として、地域生活への支援と地域の場での障がい者雇用を展開し、障がい等の有無にかかわらず、あたりまえに暮らせることに貢献できているかだと思われる。

「後庵」は、岩手県内の福祉関係者や接客業の経験者の有志でつくる紫波湧活協議会「しわ元気村」が、地元で人気だった閉店した食堂「後庵」の空き店舗を使って、障がい者の働く場を提供する食堂だ。経験者のノウハウの活用・空き店舗利用のまちおこし・障がい者の就労や活動の広がり・地域とつながるさまざまなアイデア&取り組みなどなど、興味津々の展開である。

でも、少し残念なのが、「名称である『湧活』には、生活弱者の生活や就労支援によって、その人の力を引き出すエンパワメントの意味がある」という説明だ。

「エンパワメント」とは、「本人の共に生きる価値と力（＝共生力）を高める」ことであって、その人の個別の力という非関係的なとらえ方が、人を強者や弱者に分けてしまう。「共に生きる価値や力」は本人とそれを取り巻く関係性から生まれるのであって、その意味ですべての人が平等であり得ることが「共生の物語」にとっては、とてもたいせつなのだ。それがわかれば、専門家が何かを引っ張り出してあげるニュアンスをもつ、「その人の力を引き出す」ではなく、「共に紡ぎあげる物語」であることがわかる。

その意味で、実際にこれら3つの地域活動は、まさに《共に紡ぎあげる共生物語》だと言えよう。



再興のまちを飾る スペインタイルの彩り

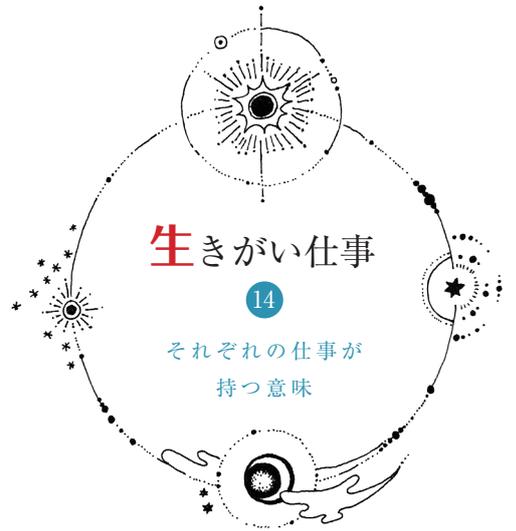
みなとまちセラミカ工房
(宮城県女川町)

宮城県の東部、太平洋に面した女川町。震災前は、奥州街道の一角にオープンした。立ちあげ時のメンバーは6人。震災前に行っていた陶芸サークルを通じて知り合ったメンバーだ。震災時には全員が津波で被災し、家や仕事を失った。

メンバーがスペインタイルを知ったのは震災後のこと。女川町と共通点の多いスペインのガリシア地方との異文化交流が計画されたことをきっかけに、スペインタイルの存在を知った。コースターやマグネットなどの小さなものから制作を始め、現在では表札や壁画などの大きな作品も手掛けている。

1000度に近い高温で焼きあげるタイルは、色が褪せることはない。「1000年先まで女川の姿を残すことができた」という思いから、タイルの絵柄は海上獅子舞や紅白の灯台、ウミネコなど、女川の姿にちなんだものを多く制作している。

女性
の雇用創出にも一役
現在のメンバーは10人。全



お土産にぴったりな小物も。
マグネット税別 900円、コースター税別 1,600円など



店内の一角にある工房で制作を行う



表札のオーダーは税別 8,500円～

DATA
NPO法人
みなとまち
セラミカ工房

〒986-2261 宮城県女川町
女川浜字大原1-4 シーパルピア女川E棟21
TEL / FAX 0225-98-7866
URL <http://www.ceramik-anagwa.com/>
E-mail ms_cobo@ybb.ne.jp

員が女性で、小さな子どもを抱えるメンバーもいるが、工房ではお互いの事情を理解し合うことで、無理のない範囲で働くことが可能だ。焼成以外の作業はあまりスペースをとらないため、在宅で作業を行うこともできるという。

オーダーメイドでの制作も行っており、全国各地から注文が入る。現在では制作が追い付かないほどの注文があり、完成まで3〜4か月待ちの状態が続いているという。

工房は15年12月にJR女川駅前の商業施設「シーパルピア女川」に移転し、作品の制作・販売とタイル制作体験のワークショップを行っている。店内にはたくさん

タイルが並び、訪れた人の目を楽しませている。「店内に入った瞬間、笑顔になつてくれる人が多くて、こちらまでうれしくなります」と代表の阿部鳴美さんは微笑む。

震災復興の一環として始めた制作だが、女川の新たな名産品として、長く続けていくことが目標だという。津波の被害から一歩ずつ歩を進める女川町を彩るタイルが、新しいまちになつていくことを期待したい。吉

地域の住民に きずなを もたらず場所

きずな喫茶
(宮城県七ヶ浜町)



お茶会が開かれている避難所。津波の被害を受けた公民分館の代わりに建てられた。



毎週水曜日になると、七ヶ浜町松ヶ浜地区の避難所に、一際にぎやかな笑い声が響く。同区ではお茶会「きずな喫茶」が、13時から15時の間、開かれているのだ。会では、お茶だけでなく、持ち寄った料理で食事しながら会話に花を咲かせる。持参者も「みんなに食べてもらおうとうれしい」と笑顔で話す。余った料理はみんなで分けて持ち帰る。会は終始和やかな雰囲気、参加者からは「楽しい」「いい場所」との声。

会の特色はとにかく「自由」なこと。参加の強制はせず、個人の悪口だけは禁止だが、ほかに規則はない。役割を決めずとも、来た人から率先して準備する。「規則や役割を決めるとそれに縛られるから」と、世話人で町営住宅住民の館山久美子さん(64歳)と目黒春美さん(61歳)は説明する。また、「ふらつと集まれる場所になったら。お茶を一杯飲んで帰られてもいい」とも。当初は館山さんらが自宅で、知り合いと数人でお茶飲みをしていた。会が広がる契機となったのは、移動学び舎バス「きずな号」との出会いだ。きずな号は特定非営利活動法人レスキューストックヤード(RSY)が運行。当時、仮設住宅などを回り、勉強場所が不足した子どものために、机など学習環境が整った車内を提供していた。現在はRSY運営の地域コミュニティスペース「きずなハウス」で学習の場を提供。主に下校後や休日の子どもが利用し、RSYの職員やボランティアらが勉強も見ている。

館山さんらは、人が集まれる場に、と車内でのお茶会を企画。各世帯にチラシを配布し、告知した。いまは人数が10人を超えて開催場所を避難所に移したが、きずな号はコーヒーメーカーなど備品を運んで活躍。RSYの職員も、参加の呼びかけや準備を手伝い、話の輪にも加わる。住民から「ごうちゃん」と呼ばれる親しまれる、郷古明(ごうこあき)さん(27歳)は「会の存在が、孤独死の防止や防災にもつながるのでは」と話す。



お茶会の様子

DATA

**特定非営利活動法人
レスキューストックヤード**

愛知県を本拠地として被災地での支援活動や、まちづくり、人づくりなどの事業を行う。震災前から防災講演などで七ヶ浜町とつながりがあったことから、震災直後、優先して支援に入る。ボランティアセンターの設立をサポート後、産業支援や、親子の支援、足湯ボランティア、傾聴ボランティアなど、多様な支援を行ってきた。現在も七ヶ浜町に事務所を構え、住民や自治体と連携して、お茶会などの住民主体の取り組みを支えている。

松ヶ浜の町営住宅(復興公営住宅)は、25戸25世帯。2015年4月より入居開始。震災以前は周辺の5地区に分かれていた住民が集まって住んでいるため、互いに顔も名前もわからない関係が大半を占めていた。それが、お茶会によって一つのつながりが生まれ、互いに挨拶をし合う関係が生まれた。現在は町営住宅住民に



きずな喫茶参加者兼世話人の館山久美子さん(右)と目黒春美さん(左)

海辺の潮風にも負けず、
たくましく咲く「はまなす」。

昔は周辺によく見られた花と

地域への親しみを忘れない。

浜のお母さんたちが

切り盛りするカフェは、

その地域から離れて暮らす

人たちをつなぎとめ、

新たな交流を生む。

長面浦を眺めながら
海の幸と会話を楽しむ



心強い3人体制ならお客との会話も楽しめる（中央：濱畑千代子さん）



DATA

はまなすカフェ

〒986-0112
宮城県石巻市長面平六1-3
日曜日：10:00～15:00
月～土曜日：予約のみ
TEL 090-7330-3311



地域内外から人が集う交流拠点に



接客も楽しみのひとつ



カキや鮭などその季節の旬を味えるランチ（800円）

宮城県石巻市◎はまなすカフェ

宮城県石巻市の長面地区（146世帯）・尾の崎地区（58世帯）では、主に漁業、農業などで生計を立てながら計204世帯が暮らしていた。東日本大震災の津波でほとんどの家屋が流され、居住禁止地域に指定された。住宅跡地が広がるなか、目の前の長面浦で育てているカキの加工場わきには、震災後に建てられた「はまなすカフェ」が、2015年4月から毎週日曜日に開かれている。旬の海の幸を用いたランチや、コーヒーなどを楽しむことができ、ほかへの転居を余儀なくされた元の地域住民や、遠方から復興支援に訪れる人、子連れ家族や高齢者など、毎週20人ほど、さまざまな人が近況を話したり、憩う場となっている。調理・接客をするのは、離れた仮設住宅などから通い、カキの殻剥きなどの漁業にも勤しむ主婦たち15人。日曜日以外は、夫たち漁師と休憩所に使い、開店日には3人ずつで店番をする。

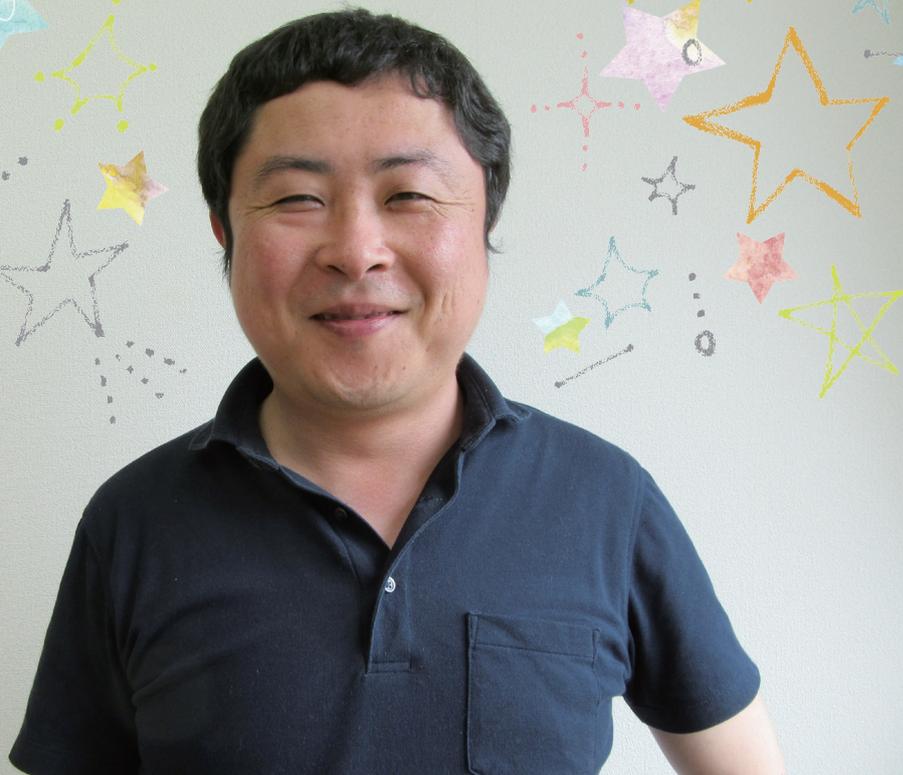
「長面の景色、食を多くの人に喜んでもらいたい」と話す、代表の濱畑千代子さん。地元での居場所をつくり、スタッフ同士もますます親しくなったという。温かみのあるカフェ内では、スタッフやお客のふれあいが育まれている。

清

信じて頼れる地域を目指して

宮城県東松島市◎

社会福祉法人 東松島市社会福祉協議会 東松島市生活復興支援センター
コミュニティソーシャルワーカー 渡邊 英人さん



災害公営住宅や防災集団移転地の造成が進み、プレハブ仮設住宅入居者の大幅な減少が予測された2016年度。4か所あった被災者支援の拠点・被災者サポートセンターは、市役所の担当部署との協議の結果、今年度より1か所に集約。新体制となり、被災者支援事業を行う東松島市社会福祉協議会の活動を渡邊英人さんにお伺いする。

CSW

私たちコミュニティソーシャルワーカーの現在の主な役割は、社会的孤立の防止と地域の支え合いづくりです。

社会との継続的な関わりは、仕事や学業、家族や友人知人などを通じて結ばれますが、災害公営住宅には比較して、その関わりが希薄な方や困難な状況にある方がいらっしやいます。また特に、そのような災害公営住宅が立地する地域や防災集団移転地では、これからの地域での支え合いを如何にすべきか模索されています。

社会的孤立の防止も、地域の支え合いづくりも、基盤となるのは人と人との信頼関係だと思えます。信頼

の無い人と関係は築けません。信頼関係はコミュニケーションの履歴、積み重ねから生まれます。

私が信頼関係を築くために必要だと思うことは、相手を全人的に把握すること。その方の強みや取り巻く環境を理解すること。役割や存在を承認でき伝えられること。また、約束をしたならば必ず履行することの4点です。それに加えて冗談や笑いを交えることは、自己開示の観点からも必要なことです。

多様な個人や団体組織と信頼関係を築き、人々をつなぎ、それが苗床となり、広く他者を信じて頼れる地域社会が実現することを私たちは目指しています。(談)

東日本大震災・おらいの地域の元気興し

支え合い

S-1 グランプリ 第4回いがす大賞

地方創生・新しい総合事業 大見本市

参加者大募集!

応募〆切 2016年12月2日(金)

各地の元気な支え合い活動を発表し、交流することで、互いに称え合い、学び合うコンテスト「S-1 グランプリ」を今年度も開催!
今回は、東日本大震災・熊本地震の被災地域の活動発表で「大賞」と「準大賞」を、被災地域以外からの活動発表で、被災地域に生かせる「活動提案賞」を競います!
応募書類をもとに予選審査を行い、予選通過者は2017年2月に宮城県仙台市で開かれる本選へ出場できます。会場での発表を審査委員や観客の皆さんが審査し、特に素敵な取り組み・発表を表彰します。
コミュニティづくり、地域づくりなど、今回もたくさんのご応募をお待ちしています!

2017年2月26日(日) **せんだいメディアテーク1階「オープンスクエア」**

宮城県仙台市青葉区春日町2-1

(各本選出場者・団体へ、お1人分の交通費を実行委員会で負担します)

応募方法: 募集要綱・申込用紙をCLCのホームページからダウンロードして、〆切までに事務局へ応募書類をお送りください。

表彰

大賞	10万円 + 副賞
準大賞	3万円 + 副賞
活動提案賞	3万円 + 副賞

【お問い合わせ先】

「S-1 グランプリ 第4回いがす大賞」実行委員会
事務局 全国コミュニティライフサポートセンター (CLC)
〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30
シンエイ木町ビル1F
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
HP <http://www.clc-japan.com/>
担当 清野、田中、小野寺 (知)



S-1グランプリ第3回
いがす大賞(2016年2月)
出場者の皆さんと審査委員

地域支え合い情報

50号記念「地域支え合いサロン」開催のお知らせ 参加者募集中!

今号で「月刊地域支え合い情報」は記念すべき発行第50号を迎えました!
そこで、皆さまへ感謝を込めて、読者の皆さまとの交流イベント「地域支え合いサロン」を開催します!!
当日は、弊紙の取材担当者も参加予定です。新たなつながりづくりの場や、皆さまの日頃の地域活動をPRする場としてもご活用ください。ぜひ、ふるってご参加ください。

日時: 2016年11月5日(土) 10:30 ~ 12:00 (途中入退出自由)

場所: せんだいメディアテーク1F「クレプスキュールカフェ」

参加費: 無料 (別途飲食代がかかります)

参加希望される方は、「全国コミュニティライフサポートセンター 担当: 田中・清野」までお電話、メールでお申し込みください。

TEL 022-727-8730 E-Mail joho@clc-japan.com

なお、当日飛び入りでのご参加も受け付けております。どうぞお気軽にお立ち寄りください。
詳細は <http://www.clc-japan.com/> からご確認いただけます。

● Profile

ご近所福祉クリエーター 酒井保 (さかい・たもつ)

1961年広島生まれ。知的障がい者施設、市町社会福祉協議会、認知症グループホーム・小規模多機能型施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエーション」を創設(主宰)。ご近所福祉クリエーターという肩書きのもと、広島と仙台を拠点として、全国各地を講演行脚中。

2016年度より、宮城県塩釜市をはじめ岩手県・宮城県・福島県で地域支え合い活動の立ち上げ等にかかる諸事業に参画。イラストレーター。

主な著書に、「見守り活動」から「見守られ活動」へ(CLC発行)、「生活支援コーディネーターと協議体」(共同執筆,CLC発行)。



笑顔でおりなさい ～昭和の福祉回想～

ご近所福祉クリエーション主宰 酒井保

ある福祉関連の月刊誌に寄稿した原稿が書棚の奥から出てきた。8年前に書いた僕自身の体験エッセイのようなものである。何がどうということでもないが、「昭和の時代」の福祉観を思い出させてくれたので、以下に原文のまま紹介したい。

タイトル：笑顔でおりなさい

二十五年前の涙を忘れることができない。

大学で福祉を学んだ私は、障害を抱える人たちが生活する福祉施設で働く道を選んだ。そこで私が初めて担当したのは、笑顔が可愛いミキちゃんだった。

ミキちゃんは十九歳の女の子。

着任して最初の保護者面会日、ミキちゃんのお母さんは深々と頭を下げたと言った。

「先生、この子は動くことがかなわん子です。ええ、面倒をかけたままが堪えてください」

「お母さん、頭を上げてください」

「この子には言うて聞かしてです。いつも笑うておりなさいと。笑うておればみんなが可愛がってくれる。優しくうしてくれる。じゃからへありがとう」の言葉を必死で覚えさせた。よ。会話することはかなわんが、こちらが言うてるとはみんなわかりませう」

と、ベッドに横になつてミキちゃんのお顔を優しく撫でながら言った。

「アッガトー(ありがとう)」と声を上げ、ミキちゃんは顔を笑顔にした。

「先生、恥ずかしい話ですけど。私も六十になりました。四十を過ぎて産んだ子です。可愛くてしょうがないです。でな、先生、この子が二十

歳になつたらな。パーマあてて、化粧して、エエニヨボ(美人)の意)にしてな。『二十歳の記念写真』を撮つてやろうと思ふんよ。なあんか、それが母親としての役目のような気がしとるですよ」

お母さんは、目じりに深いシワを刻み、まるで、その写真が見えているかのように両手のひらを眺めて笑った。

それは八月のお誕生会の最中だった。八月生まれのミキちゃんは折り紙で拵えた首飾りをつけてもらい、いつも以上の笑顔振りまいていた。それもそのはずである。この日は、朝からお母さんの面会があり、お誕生会の記念写真」を撮るといふ楽しみが待っていたからだった。

ミキちゃんの異変に気が付いたのは、パースデーケーキを食べた直後だった。「ゴッソ！」という咳と一緒に食べたものを

すべて吐き出したのである。「ミキちゃん、どうしたん？ 苦しんか？」お母さんが声を掛ける

と、すぐに笑顔を作つてニコリと笑つて見せたが明らかに苦しい様子であった。眉間にシワをよせて、苦しいはずなのに笑つて見せている。そのうち痙攣……

「アッ……ガトー……アッガトー……」

「わかつたけえ、ミキちゃん……もうええから……もうええから」

救急車での搬送中もミキちゃんは苦しはずなのに「アッ……ガトー」と幾度も声を搾り出し、苦痛に歪みかけた顔を笑顔に変えた。

《腸閉塞》……危険な状態だと医者は言った。

病院へ搬送されてから九時間後、お母さんと私は看護師の促して治療室へ入った。静寂の中、治療器具の電子光だけが忙しく点滅していた。呼吸をしているのか、いないのか判らなかつた。「開腹するも既に施しようのない状態だった」と。

「ミキちゃん！」お母さんが声を掛けてもミキちゃんは動かさなかつた。でも、目を閉じたその顔は、いつもの笑顔のままだった。

お母さんは優しくミキちゃんのお顔を撫でながら「ごめんよ

……ミキちゃん。苦しかつたね。痛かつたんよねえ。もう……もう笑わんでもええから。もう笑わんでもええからね」

お母さんの謝罪の言葉が嗚咽に変わっていく中で、ミキちゃんは逝つた。

痛いの……苦しいの……何で(アッガトー)と言いなから笑うて死んだ？ 何で死ぬるときまで笑うておらんといけんのか？ 私も泣いた。

お母さんの涙と私の涙、この涙に意味の違いがあつたのだろうか？

「先生……これ見て」お母さんは私に両手のひらを差し出した。

綺麗にお化粧した笑顔のミキちゃんの写真が見えたような気がした。

以上。「昭和の時代」の話である。平成のいま、福祉観はどう変わったのだろうか？



宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

駆け込み女と駆け出し男

最近の日本映画は、寅さん以降あまり観ていませんが、たまたま WOWOW でこの表題の映画を観たので、感想を綴ります。原作は、井上ひさしさんの『東慶寺花だより』です。

東慶寺は、江戸幕府公認の女性救済のための駆け込み寺。もう一つの女性救済の寺は上州にあった満徳寺で、ここは縁切り寺です。

さて、面白く観たなかで、強く印象に残ったのが東慶寺の院代（寺のトップ）の法秀尼の存在。原作ではあまり出てきませんが、凛とした存在で、寺法（お寺の掟）を超えて駆け込み女性を守る姿勢は、さしずめDV被害女性を厳しくも優しい眼差しで支える女性弁護士を想起させてくれました。演じた女優さんは「はまり役」、確か宝塚出身の方でした。法秀尼さんのようなワーカーがいたら『素敵』だと思いました。素晴らしくて、私にはとても適いません。

駆け出し男、中村信次郎を主役にしてますが、この本や映画の主役は女性です。この映画で、改めて「戦後強くなったのは女性と靴下」という言葉を思い出しましたが、江戸時代においても女性は十分に強かった、という原作の解説を記している長部日出雄さんの指摘に賛同する次第です。

男は、どこか立場や世間体を引きずって女々しい、いや情けない。女性は、どんな立場に置かれても貫きとおしたたおやかな勤さが、ありありと浮かび上がって来る（長部さんの弁）。

具体的な内容は、本を読むなり、映画でどうぞ。

私の周りも、このたおやかさをもつ女性が少なくありません。一方、さえない男もいっぱいですね。その一人に私も加わっていることは、言われるまでもなく自覚しています。だから、たおやかさのあふれる法秀尼さんのようなワーカーが必要です。貴女ですよ！（お前じゃ、ない!!）

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上章



被災地でいろいろな人との出会いがあった

物事の本質をつかむことに鋭く、話しているといつも何か新たな気づきをもたらしてくれるパートナーがいた。強き者には強く、弱き者にとことん優しい遠山の金さんみたいな人がいる。熱い思いを胸に秘め、難問をこどもなく解決する。『めんどくせ〜』が口癖の、最も頼れる人。とことん相手を信じて、諦めず支援し続ける人がいる。孤軍奮闘している市町のキーマンに優しく寄り添う。やがて途切れがちな関係者がつながり、みんなが同じ目標に向かって力合わせが生まれる。誰にでもフレンドリーに声をかけ、すぐに友だちになれる人がいる。親しみのトークでたちまち周りの人は鎧を外し、親しさに変わる。“楽しく”をモットーに生きる親爺がいる。知識も夢も豊かにもつ人、出会うと愚痴があいさつ代わり、だけど不思議と憎めない愛しき人がいる。津波で家を亡くした認知症のおばーちゃんがいた。誰も相手にしないおばーちゃんは仮設住宅から離れた牛小屋に行く、付き添ってふんにまみれて牛の世話をした支援員さんがいた。寄り添う純な言動が、おばーちゃんの精気を蘇らせ、心無い人と無関心な息子の心を変えた。電気もない古びたプレハブで寝泊まりし、島の復興に心砕いた人がいた。自愛あふれる存在が、多くの若いボランティアを惹きつけ、島民のパワーを引き出した。“無為自然”な姿が「老子」を彷彿させる人だった。こよなく地域福祉と社協を愛した人がいた。もうすぐ死を迎える病院のベッドで、親しき見舞い人に『人生でたいせつなことは“愛”だけなんだよ』と伝えた。時代と世相の先を素早く見据え、龍馬のように全国を飛び歩き時に国を動かし、被災者支援の最前線で働く支援員たちの育成を先駆け導く人がいる。まだまだいっぱいいる。そんな素晴らしい人たちと出会った。多くの感動をいただいた。幸せと感謝の念でいっぱい。時に自らと比べて落ち込むこともある。でも、“みんなちがってみんなよい”（金子みすずの詩）比べなくてよい。ただ、私はいまの私を精一杯生きればよい。そんなふう思う。ところで、あなたにはどんな出会いがありましたか？

平成28年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

分野別研修Ⅲ 認知症の人の理解と支援

支援に関わるための基礎研修

【石巻会場①】 10月27日（木） 石巻市河北総合センター（ビッグバン）

【石巻会場②】 10月28日（金） 石巻市河北総合センター（ビッグバン）

【気仙沼会場】 11月24日（木） 気仙沼保健福祉事務所

【仙台会場】 11月25日（金） 戦災復興記念館

講師：高橋 誠一（東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授）

寺田 真理子（日本メンタルヘルス協会 公認心理カウンセラー）

【仙台会場②】 10月31日（月）～11月1日（火） エスポールみやぎ

講師：永坂 美晴（明石市望海在宅介護支援センター センター長）

山本 信也（宝塚市社会福祉協議会 地域福祉部 地区担当課長）



東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

「山形に住み続けたい」避難者を応援する

◎復興ボランティア支援センターやまがた（山形県）

東日本大震災により山形県には、福島県や宮城県などからの避難者3086人が生活する（2016年8月4日時点）。福島県が避難指示区域外からの自主避難者に対する借上げ住宅の無償提供を17年3月で打ち切る方針を示していることを受け、住まいに関する悩みが深まっている。

昨年8月に山形県が避難者にアンケート調査を行ったところ（回収率約35%）、「山形に住み続けたい」という回答が、初めて3割を超えた。それを受けて、地元NPO団体と山形県が協働して11年8月に立ち上げた「復興ボランティア支援センターやまがた」では、避難者への情報提供・相談・集いの開催などに加えて、今年度は定住支援を視野に入れた情報紙を2回発行。山形暮らしの魅力発信しつつ、県内3か所に設置された「避難者定住サポート窓口」の一つとして、避難者からの相談に答えている。

化させた「特別版」（6月発行）と、県内35市町村の魅力を盛り込んだ「やまがた暮らし応援ガイドブック保存版」（8月発行）の2種類。いずれもフルカラーで、山形に住むと決めた人へのインタビューや、県内2か所の暮らし体験住宅の訪問レポート、住まい・仕事の相談窓口などを紹介している。

事務局スタッフの多田曜子さんは、取材にあたるなかで、いま住んでいる場所への定住だけでなく、山形県内での他市町村への移住や、進学など子どもの成長に合わせた中長期の滞在など、一口に定住と言いきれない、さまざまな生活スタイルがあることを実感したという。そのため情報紙の編集にあたっては、「多様な山形暮らしを応援する内容を心がけた」と話す。保存版には、避難者の交流会や保養施設の紹介、子育て支援の情報のほか、県内温泉マップを掲載し、山形らしさをPRしている。復興ボランティア支援センターやまがたの果たす役割は大きい。

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ（地域づくり）から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

48号の特集記事を読んで、移動販売がただ買いの助けとなるだけでなく、地域のコミュニティづくりや高齢者の見守りにまでつながるなんて、驚きました。最近インターネットでなんでも買えてしまいますが、人とコミュニケーションをとれる機会ってとてもたいせつですね。（仙台市青葉区M・C）

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail johoh@clc-japan.com

編集後記

先月号より記事の執筆に参加させていただくことになりました田中です。まだわからないことも多いですが、地域の皆さまから支え合いづくりのコツを勉強させていただくつもりで、取材にお伺いしたいと思います。紙面とおして、支え合いの輪が広がる一助となれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。（田中）

お知らせ

☆次号予告 特集「みんなのたまり場」

平成28年度 宮城県地域福祉コーディネート研修事業

<地域福祉コーディネート基礎・実践研修>

【仙台会場②】 11月17日（木）～11月18日（金） エスポールみやぎ
講師：藤井 博志（神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 教授）
井岡 仁志（高島市社会福祉協議会 事務局長）

平成28年度 岩手県高齢者等サポート拠点職員等研修事業

<分野別研修 子供を取り巻く環境の変化と子育ての理解>

【盛岡会場】 11月9日（水） 岩手県産業会館
【釜石会場】 11月10日（木） 岩手県水産技術センター
講師：塚本 秀一（社会福祉法人湘南学園 専務理事、
保育の家しょうなん 園長）

